2022年度

国　　語

最初に、以下の注意事項をよく読んで下さい。

1．問題冊子は監督者の指示があるまでは開かないで下さい。

2．監督者の指示にしたがって、解答用紙に**受験番号**と**氏名**を記入してください。問題冊子は**受験番号**のみを記入して下さい。

3．試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは、手をあげて下さい。

4．受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出て下さい。

5．問題冊子および解答用紙は持ち帰らないで下さい。

6．字数制限のある問題については、句読点なども１字として数えるものとします。

受験番号	

HJ 2月19日

【一】 次の各問いに答えなさい。

問一、 次の①～⑥の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなを書きなさい。

① 人権をヨウゴする。　② 突然の休校にコンワクする。

③ 回復を祈りセンバヅルを折る。　④ 優勝の栄冠にカガヤく。

⑤ 荒廃した土地を再生する。　⑥ 一日八時間以上のスイミンをとる。

問二、 次の中から「品行方正」と似た意味を表すものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア、顔が広い　イ、紺屋（こうや）の白袴（しろばかま）　ウ、折り目正しい

エ、礼儀にかなう　オ、立つ鳥跡を濁さず

問三、 次の（　　）には「わずかな時間」という意味の四字熟語が入る。その四字熟語を漢字で答えなさい。

日本の歴史を理解するなんて、（　　）にはできない。

問四、 次の（　　）に適切な漢字二字を入れ、慣用句を含む文として完成させなさい。

① 研究のためといっても、費用を（　　）のように使えるわけではない。

② 彼の誤解を招くような態度が、部内に（　　）を立てた。

HJ 2月19日

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔中学二年生の「わたし（真汐凜奈）」は図書委員で、休み時間は人の少ない図書室によくいる。新しく司書として赴任した塚本先生は、図書室の環境を改めようと、「わたし」に掃除や整頓を手伝ってほしいと頼む。ある日、作業中に二人は古い手紙を見つける。そこには二十年近く前の日付で、未来の自分は女優になるという夢を叶えられているかという内容が書かれていた。「わたし」はそんな夢は叶っていないに決まっていると言い張るが、先生は同意しない。ついには先生が勝負しようと言い出し、手紙の主が女優になっていなかったら「わたし」の勝ちで、可能な限り「わたし」の言うことを聞くと約束をした。〕

手がかりは、まるでないわけじゃない。

名前はわかっているんだし、手紙にはそれを書いた年月日まで記されている。つまり、卒業アルバムとか、そういうのを辿っていけば、なにかがわかるかもしれない。卒業生が女優になったとしたら、昔からここに勤めている先生たちが知っている可能性だってあるだろう。

放課後、わたしは携帯電話の小さな画面に、その子の名前を入力してみた。けれど、加藤公子で引っかかるページはなにもない。ほら、わたしの勝ちだよ、と画面を掲げると、先生は唇を尖らせて言った。

「芸名を使って華々しくデビューしてるかもしれないでしょう？」

ああ言えばこう言う。わたしは携帯電話を閉じて溜息をつく。

「それじゃ、卒業アルバムを確かめてみます。写真見て、すごい美人なら、a脈があるかもしれないですから」

けれど、二十年近く前の卒業アルバムなんて、どこにあるんだろう。

①この図書室に、あるんだろうか？

「そういうのは、保管庫にあるかもしれないわね。職員室に行ってみようか」

「職員室、ですか」

HJ 2月19日

とてもじゃないけれど、居心地いいとは言えない場所の名前だった。思わず顔をしかめてしまう。

「先生が一緒だから、大丈夫だよ。悪いことするわけじゃないんだから」

わたしは塚本先生に連れられて、職員室へ向かった。なにも悪いことをしていないはずなのに、職員室へ近づくにつれて、どうしても俯き加減に廊下を歩いてしまう。

「失礼します」

[1] 声を漏らして、職員室へ入った。他の先生たちと眼を合わせないように、塚本先生の背中についていく。塚本先生が向かったのは、鈴木先生のところだった。厳めしい目つきのハム子先生だ。よりによって、この先生だなんて。わたしは彼女に睨まれないよう、爪先に視線を落とした。塚本先生が、鈴木先生になにかを説明している。

「よろしくお願いします」

と、塚本先生が頭を下げたので、わたしもそれに倣って [2] お辞儀をした。どうやら、保管庫とやらに入るには、ハム子先生の許可が要るみたいだった。

「まぁ、いいですよ。学校の歴史に興味を持ってもらえるなんて、嬉しいことですね」

塚本先生がどう説明したのかは聞こえなかったけれど、ハム子先生は立ち上がった。

「あ、塚本先生」

他の先生が、塚本先生に声をかける。

「はい、なんでしょう」

「今朝の件なんですが――」

なんてことだろう。塚本先生は、そのまま奥の机の方へ連行されてしまった。視線で、あとはよろしくお願いしますね、というサインをハム子先生に送ったのが見えた。よりによって、この厳めしい先生と二人きりにされてしまうなんて、聞いていない。

「それじゃ、真汐さん、行きましょうか」

わたしは（ i ）の鳴くような声で応えて、居心地悪い心境のまま、[3] ハム子先生のあとを追った。こんなことなら、

HJ 2月19日

この奇妙な勝負に乗ったりするんじゃなかったと早くも後悔してしまうくらい、わたしは怯えていた。

保管庫は職員室の近くにあって、ハム子先生が鍵を開けた。室内はとても狭くて、スチールの戸棚に書類みたいなのがぎっしりと詰まっているのが見えた。卒業アルバムらしきものも、そこに収まっているようだった。あまり人の出入りがないのか、図書室よりかび臭く感じる。

「それで、何年度のことを調べたいの？」

「えと……」

わたしは、手紙に書かれていた年度を伝えた。ハム子先生が戸棚の前に行き、目的のアルバムへと指を滑らせる。

「あら、この年って」先生は思い出したように声を上げた。それから、アルバムに手を掛ける前に、肩越しにわたしを見て言う。

「なにを調べたいの？」

「えと、その」

要領よく説明するのは苦手だった。わたしを一人きりにして、覚えていろよ、塚本先生め、と内心で毒づきながら、たどたどしく説明する。

「本の中に、手紙があって。未来への、手紙なんですけど」

これを書いた人が、いまなにをしているのか、調べたいんです。

どうにか、そう伝えながら、わたしは塚本先生から預かっていた手紙を彼女に見せた。

②

鈴木先生は、しばらくわたしの差し出す手紙をじっと見ていた。

なにか、怒らせてしまったのだろうかと、不安になる。

「これって」

ようやく、先生が呟く。普段、はっきりとした声で話す彼女にとっては珍しく、それはかすれたような声音に聞こえた。

「あら、やだ……。これ、どこにあったの？」

手紙の文面に眼を落としながら、先生が言う。

HJ 2月19日

「その、図書室の本の中に、挟まっていたみたいなんですけれど……」
「そうなんだ」
それから、じっと手紙に眼差しを注いだまま、鈴木先生は柔らかく笑う。
「この加藤公子っていうのは、わたしのことですよ」

しばらく、呆気にとられていた。
だって、こんな展開、想像もしていなかったから。
鈴木先生は、手紙に眼を落としたまま、納得するように言葉を零す。
「そうね。そうだった。確かに、こんな手紙を書いたかもしれない。確か、図書室で調べ物をして、そのときになくしてしまったんじゃなかったかしら。先生に言われて、もう一度同じものを書かされたんだけど、なんだか恥ずかしくて、ぜんぜん違う文面にしたような気がするわ」
「えっと、でも、加藤って」
「いやね」先生はわたしを見て笑う。「先生だって、結婚してるのよ」
そうかと、当たり前のことに気づく。それで加藤が鈴木になったんだ。それから、もうひとつ閃いた。ハム子先生のあだ名の由来だ。公子は、ハム子って読めなくもない。
「そうね。あの頃は、わたし、女優になりたかったのねぇ」
そんな夢を、まるきり忘れてしまっていたみたいに、先生は言う。
それから、じっと手紙を見つめていた。眼をこらしているせいかもしれない。③わたしは、肩を小さくするように手紙を読んでいるハム子先生の身体が、ひとまわり縮んでいくように錯覚した。いつもは鋭い眼差しの目尻に、涙が浮かんでいるのを見る。
先生は鼻を鳴らした。
目頭を押さえている先生に、わたしは訊いた。

HJ 2月19日

「先生、悲しいんですか？　子どもの頃の夢を、叶えることができなかったから」
ハム子先生はかぶりを振った。
「いいえ。そんなことないのよ」
先生は笑う。
「確かに、夢を叶えることはできなかったかもしれないけれど、あの頃の自分からすれば、考えもしなかった自分になっているものなんだって……。なんだか懐かしくなっちゃってね」
もうすっかり忘れてしまっていたけれど、あの頃は女優になりたくて仕方なかったのよね。舞台女優になりたくて、劇団に入って練習に明け暮れて。十代の頃は、女優になれなかったらどうしようって、不安で不安で仕方なかった。それ以外の未来なんて、これっぽっちも考えられなかったから。夢を叶えられなかったら、自分が死んじゃうんじゃないかしらって、本気で想っていたくらい。
「けれど、案外とどうにかなるものなのねえ」
④
そう笑う先生は、悲しみの気配なんて、微塵も感じさせない表情をしていた。
大きくよく通る綺麗な声と、舞台の上から鋭く客席を見渡すようなその眼差しは、むしろしあわせそうな色をたたえている。
「でも、なんだかすごいわね。こうして、本当に未来の自分に届くんだもの。こんな貴重な体験ができるなんて、思ってもいなかったわ。本当に人生って、なにがどうなるか、わからないものね」
真汐さん、ありがとう。
わたしは照れくさくなり、もう調べ物は大丈夫ですと告げて、その場所をあとにした。

図書室に戻って塚本先生に報告すると、書架と睨めっこをしていた彼女は、そうだったんだ、と声を上げて笑った。どうしてか、あまり驚いているようには見えない。わたしはテーブルに肘をついて、作業を続けている先生の横顔を見つめていた。
「確かに、夢は叶わないこともあるのかもしれないわね」

「言ったじゃないですか。たいていは失敗するって」
塚本先生は、わたしを一瞥(いちべつ)して微笑(ほほえ)んだ。
「でも、未来が考えていたものと違ったとしても、そのときに抱いていた気持ちは、きっと無駄になんてならないと思う。あとで懐かしんで、そのときの思い出に、[4]栞(しおり)を挟んで読み返したくなるような、大切な時間になると思うわ」
先生は、書架から本を抜き出しながら、歌うみたいに言う。
それはどうだろうと思った。たとえば、わたしが大人になったとして、今という時間を思い返したくなるだろうか。そうは思えなかった。みんなから嗤(わら)われて、教室に溶け込めず、悔しくてつらい気持ちばかり抱いているこの時間を、もう一度味わいたいだなんて思えるはずがない。だから。
「そんなの、嘘(うそ)だよ」
わたしは俯いてうめく。
「そんなことないわ」
「どんなにつらくて、しんどくても？　今がつらくて、絶対に思い返したくないときでも？」
「信じられないかもしれないけど、いつか懐かしめるときがくる。つらい思い出だとしても、そのときの気持ちを、バネにできるときがくるよ」
先生は、本を抱えて、そう笑う。
わたしは再び俯いた。
そんな日が、そんな未来が、そんな大人になれる自分なんて。
わたしには、想像ができないから。
⑤「先生、勝負、わたしの勝ちです」
わたしはうめく。
「うん、真汐さんの勝ちだ。先生は、どんなお願いを聞いたらいい？」

わたしを、一人にしないで。
わたしは瞼が熱くなっていくのを感じながら、唇を噛んだ。他の図書委員なんて要らないよ。こんなところ利用する人なんて増えなくていいよ。だから、わたしから居場所を奪わないで。ここを死んだままにしておいて。わたしを惨めな吸血鬼のまま、この場所に閉じ込めて、匿い続けて。
先生、今まで黙っていたけれど。
わたし、普通の子と違うんだ。
学校に来るのがつらい。
教室に行くのが苦しい。
みんなに嗤われて、ひどいことをされたく、なかった。
だから。
「もう仕事、手伝いませんから……。だから、ここで、読書する権利、ください」
「うん。わかった。いつまでも、好きなだけ、いていいからね。先生と一緒に、読書をしよう」
わたしは、眼が痒くなったふりをして、手の甲を押し当てた。
見上げると、先生がなにかをわたしに差し出しているのがわかる。
「これは？」
「栞だよ。約束の証」
それは、⑥白くて綺麗な、手作りの栞だった。
「いつか未来のために、この栞と一緒に、たくさんの本を読んでね。物語は、凛奈ちゃんを裏切ったりはしないから」

（相沢沙呼『しおりを滲ませて、めくる先』〈集英社〉より）

HJ 2月19日

問一、 [1] ～ [4] に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じものは使えない。）

ア、ころりと　　イ、しんと　　ウ、そっと　　エ、ふらふらと　　オ、ぺこりと　　カ、ぼそぼそと

問二、 波線部**a**・**b**の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a「脈がある」

ア、成功している
イ、確かめられる
ウ、想像ができる
エ、可能性がある
オ、確信が持てる

b「一瞥して」

ア、ちらりと見て
イ、わざわざ見て
ウ、ゆっくり見て
エ、くり返し見て
オ、じっくり見て

問三、（　**i**　）に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、鳥　　イ、猫　　ウ、虫　　エ、蚊　　オ、鼠（ねずみ）

問四、 傍線部①「この図書室」とあるが、「わたし」は「図書室」をどのようなところだと意識しているか。文中から五字以内で抜き出しなさい。

問五、 傍線部②「鈴木先生は、しばらくわたしの差し出す手紙をじっと見ていた」とあるが、その理由を三十字以内で書きなさい。

問六、 傍線部③「わたしは、肩を小さくするように手紙を読んでいるハム子先生の身体が、ひとまわり縮んでいくように錯覚した」とあるが、その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、生徒の前で泣くはずのないハム子先生の涙を見て、夢を忘れた大人の惨めさを感じたから。
2、女優になりたがっていたハム子先生が、別人を演じようとしていることが見て取れたから。
3、手紙を読みながら恥ずかしがっているハム子先生が、子どものように見えてしまったから。
4、眼をこらして手紙を読むハム子先生のようすから、ひどく年老いている印象を受けたから。
5、手紙を読むハム子先生のようすが、威厳を感じさせる普段のようすとは違って見えたから。

問七、 傍線部④「そう笑う先生は、悲しみの気配なんて、微塵も感じさせない表情をしていた」とあるが、このときのハム子先生のようすを説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることばを、【 1 】は十四字で、【 2 】は五字でそれぞれ文中から抜き出しなさい。

子どもの頃の【 1 】けれども、過去の自分を思い返すという【 2 】をして心が満たされている。

問八、 傍線部⑤「先生、勝負、わたしの勝ちです」とあるが、こう言ったときの「わたし」の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、夢は叶うはずがないという自分の考えは正しかったので、自分は今は夢を持とうとは思わないし、持つことを押し付けないでほしい。

2、叶わないとしても夢を抱いているときの気持ちは無駄にならないと信じたいので、自分の今の状況でもいずれ懐かしめるようにしてほしい。

3、先生の言うように今の自分を肯定できる日が来るとは想像できないので、今はただこれ以上つらい状況にならないようにしてほしい。

4、今の自分はつらい気持ちばかりを抱えているので、これからは幸せに過ごせるように先生だけは自分を一人にすることはしないでほしい。

5、自分は大人になったときに今のことを思い出して懐かしむことはないと思うので、今を大切にするべきだという話はもうしないでほしい。

問九、 傍線部⑥「白くて綺麗な、手作りの栞」とあるが、「栞」を通して先生が伝えようとしていることとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、勝負に勝ったのは「わたし」なので、図書室で読書をする権利を与えることを約束するということ。

2、本に栞を挟むように、今という時間に印をつける気持ちでいることで、楽しく過ごせるということ。

3、物語が誰かを裏切ることはしないので、本をたくさん読むことによって、未来が開けるということ。

4、今抱いている感情は、どのようなものであっても、未来において何かしらの意味を持つということ。

5、つらい気持ちは思い返さなければならないときが来るが、それが成長につながっていくということ。

HJ 2月19日

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人類学では、①異文化の人びとが行う「異なるやり方」を、その内部に参与することによって解き明かすことが目指される。自分にとっては「奇異」であるが、彼(女)らにとっては「普通」とされるやり方に注目し、なぜそれらは彼(女)らにとって「普通」なのか、逆になぜ私は「普通」だと思わないのか、といった疑問を真正面から扱う学問である。私はこのような探求のあり方に希望を見出(みいだ)した。

当時の私にとっての日常とは、社交ダンスの世界であった。一般に、現在の日本では、社交ダンスは非日常の世界として語られることが多い。しかし、私にとっての日常は多くの日本人にとっての非日常であったとも言える。ややこしい言い方になるかもしれないが、「私たち」にとっての異文化が、「私」にとっての自文化だったのである。

その私にとっての「異なるやり方」とは、プロのダンス教師が営む教室の外にある社交ダンスであり、スポーツや習い事として行われるわけではない社交ダンス、そして、他ジャンルのダンスであった。

教室という枠の外で、人びとはどのように社交ダンスを踊るのか。私が抱くようになった疑問は、「異なるやり方」を経由することで、どこかにつながるのではないか。そのようなことを考えるようになった。

ダンス教師としての私は「すでにフィールド[注1]にいた」ことになる。ほとんどの人類学専攻の大学院生のように、人類学的な視点を習得してから現場を選択し、それから調査に向かうのではなく、②先にフィールドがあったのである。

伝統的に「遠くの他者」(その典型例が海外の異民族)を対象としてきた人類学において、私がフィールドと定めたこの世界は、私にとってあまりにも「近い」ものだったかもしれない。しかし、当時の私にとって、自文化だと思っていた社交ダンスの世界に「異なるやり方」を見出した点で、社交ダンスはフィールドと呼ぶにふさわしいと思えた。幸い、理解ある師との出会いにより、私の探求心は受け(　i　)を得た。

人類学という思考の拠(よ)り所を得た私は、それまであたりまえに身の回りにあった社交ダンスの多様な側面を意識して見るようになった。中でも、教室の外にある多くの社交ダンスの場に関わった。別団体の競技会、カラオケとダンスの店、車いすダンス、

高齢者福祉施設、ブラインドダンス、社会福祉法人、そして、海外。いわゆる健常者と車いすの方、高齢者と若者が共にダンスを楽しむことを意図したイベントも開催した。福祉施設の協力を得て、高度な技術の伝達を極力抑えた講座を、実験的に立ちあげることも行った。

私は、「正しくなくても良いから楽しく踊りたい」という人、**1**、社交ダンスに限定せず、ダンスを踊ってみたい人全般に関心を広げるようになった。

さまざまな現場に出入りするうち、私は、社交ダンスの周りには、実に多様な人びとがいることに気づくようになった。人に見られたくて、踊りたいと思う人。人に見られたいとは思わないが、踊ってみたいと思っている人。踊りたい気持ちは大きいが、細かい決まり事はどうでも良いと考えている人。踊ることというよりも、体系化された知識を勉強することに関心がある人。「ワン、ツー、スリー」といった拍子に頼らずに、音楽そのものを踊ろうとする人。踊り手の心地良さに心を砕きながら演奏する人。業界の先行きを憂う若き教室経営者。教室の外で「正しい社交ダンス」が行われていないことを嘆く教師。逆に、教室の外で踊られているものこそ、本当の意味での社交ダンスだと強調するダンスホール経営者、等々。

私が特に心踊らされたのは、既存の教室の秩序に批判的な教師や愛好家との出会いであった。彼(女)たちの言動の中には、「教室出身」の私が抱いた違和感を解くヒントが隠されているように思え、興奮さえした。当時の私を支配しつつあったのは、それまでの日常であった教室に対する否定的な感情と、教室の外に広がる「異なるやり方」への過度のシンパシー[注2]だったかもしれない。

他者を鏡とした内省は、時に《　**X**　》にもつながる。私の場合、その極(きわみ)にあったのが教師不要論であった。「異なるやり方」の魅力が増していくにつれて、そうではないやり方をしていた自分自身に幻滅していくことがある。当時の私はそのパターンに陥りそうになっていたのかもしれない。

③針が真逆に振れないように注意しながら、彼(女)たちとの交流を通して、私にとっての社交ダンスの幅が広がることを期待した。

ある時、私の主宰する講座の中で、右手に杖(つえ)をついた高齢女性と踊ることがあった。その女性は、若い頃に友人たちと何度か

HJ 2月19日

踊ったことがあったという。彼女は腰が大きく曲がり、杖なしでは歩くこともままならない様子だった。通常であれば、踊りの種類に関係なく、男性の左手と女性の右手を合わせることが社交ダンスの前提となるのだが、その女性は杖から右手を離せないために、私は自分の右手と彼女の左手を取り合って踊り始めた。

外から見れば、踊るというよりも、ただ揺れているというのに近いかもしれない。単に足を前後に動かしているだけかもしれない。音楽にも合っていないかもしれない。しかし、二人の間では、④少なくとも彼女にとっては、何らおかしい点はなかった。その証拠に、彼女は踊り終わった後、「ああ、できたね。これだったら私にもできる。昔を思い出して懐かしいわ」と言い、笑ったのである。額にうっすらと汗をにじませながら、彼女はその後も他の参加者たちと踊り、楽しんでいたように見えた。

大切なのは「本人にとって」できたかどうかであり、外から見てできているかどうかではない。この出来事を通じて、私はそう思うようになった。

車輪の重みや回り方を考慮に入れて踊ったのは、とても新鮮だった。全盲の方と踊る経験もした。晴眼者[注3]と踊る時よりも、接触している身体により神経を配るようにした。脳性まひでベッドに横たわった方とも踊る機会を得た。指と指を触れ合わせながら、目と目で意思を伝えあうように強く意識した。

すべてが、私の中で「踊る」ことの定義が大きく更新される経験だった。

これらの経験は、私を次のような気づきへと導いた。それは、⑤身体はかくも非対称である、という事実である。[2]、「非対称であったとしても」社交ダンスが成立していることに、私はこれまでに抱いたことのない喜びを感じていた。

自分とは異なる身体の他者、[3]、その異なり方の大きさによって気づかされた事実は、それまでの私の日常を再考するきっかけとなった。

私がそれまでに行ってきたダンスも、すべて非対称な身体との交流であったことに気づいたのだ。一つとして互いに対称な身体などないという、きわめてシンプルな事実に改めて気づいたのである。それは、身体や身体機能といった形質的な事柄に限定されない。その人がどのような運動経験をしてきたのか、どのような環境で育ってきたのか、身体あるいはダンスに対してどのようなイメージをもつに至ったのか。そういった、身体に沈潜する個人史すべてをひっくるめたうえでの、非対称性である。

ダンス教師として訓練を受けてきた私は、知らず知らずのうちに、同じような身体を持った人を前提にしていたのかもしれない。自分と同じように歩くことができ、自分と同じように「ワン・ツー・スリー」と拍子をとり、自分と同じようなタイミングで、同じように踏み出す人。目の前の人をそのように仕立て上げることを、唯一の「踊れる」ことだととらえていたのかもしれない。

社交ダンスの世界に蓄積されてきた技術体系は、ルールを勉強すれば「誰でも」踊れることが目指されたものである。しかし、社交ダンスとは、肉体レベルで互いの意図を確認し合い、伝えあうものであるという点を忘れてはならない。「知っているから動く」のではなく、知識は頭の片隅に置いて、「感じるから動く」ことに目を向ける。私は、このような視点を持つに至った。

他のダンス教師にとって、このことはあまりにもあたりまえ過ぎるかもしれない。[4]、私は、自身の経験や感情をもとにしてこの理解に到達したことに、他に代えがたい価値を感じている。

（井上淳生『身体の非対称性』〈ミネルヴァ書房〉より）

注1・フィールド……人類学などの研究のために赴く現場。

注2・シンパシー……共感。

注3・晴眼者……盲目ではない人。

問一、[1]～[4]に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じものは使えない。）

ア、たとえば　イ、そして　ウ、次第に　エ、あるいは　オ、同時に　カ、しかし

HJ 2月19日

問二、 二重線部**a**・**b**と同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a「まで」

ア、東京から新宿までは中央線で移動する。　イ、今は自分のできることをするまでだよ。
ウ、格下と思っていたチームにまで負けた。　エ、姉は先月までアメリカに留学していた。
オ、お土産までいただいてしまって恐縮だ。

b「つつ」

ア、もう寝ようと思いつつ本を読み続けた。　イ、空を見上げつついろいろ考え事をする。
ウ、振り返りつつ後輩たちに別れを告げた。　エ、熱心に説明しつつも間違いに気づいた。
オ、卒業制作の校舎模型が完成しつつある。

問三、 波線部**A**・**B**の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A「心を砕き」

ア、驚き　イ、配慮し　ウ、嘆き　エ、傷つき　オ、悔しがり

B「ままならない」

ア、気をつけながら行う　イ、よく理解していない　ウ、思うようにできない
エ、意図的に避けている　オ、無意識にしてしまう

問四、（　**i**　）に入ることばとして適切なものを漢字一字で答えなさい。

問五、 本文には次の一文が抜けている。どこに入れたらよいか。この直後にくる五字を文中から抜き出しなさい。

同様のことは、その後も続き、車いすの方と踊る経験もした。

問六、 傍線部①「異文化の人びと」とあるが、人類学における「異文化の人びと」を言い換えたことばを、文中から五字以内で抜き出しなさい。

問七、 傍線部②「先にフィールドがあった」とあるが、このように表現できる理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、調査する現場が具体的にあるわけではないので、どこかへ向かう必要がないから。
2、伝統的な人類学的な視点とは異なる、自文化を見つめ直すという方法を選んだから。
3、もともと自文化としているものの中にある、異文化となる要素に目を向けたから。
4、異なるやり方であっても社交ダンスのやり方なので、自文化に含まれるものだから。
5、非日常である社交ダンスを日常と捉えることによって、自文化として扱えるから。

問八、 《　**X**　》に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、自己の否定　　2、自己の肯定　　3、他者の否定　　4、他者の肯定　　5、自他の肯定

HJ 2月19日

問九、 傍線部③「針が真逆に振れないように」とあるが、ここでの「針が真逆に振れる」とはどういうことか。それを説明した次の文の空欄【　　】に入ることばを、五字以内で文中から抜き出しなさい。

「異なるやり方」の魅力を感じるせいで、【　　】に傾倒してしまうこと。

問十、 傍線部④「少なくとも彼女にとっては、何らおかしい点はなかった」とあるが、その理由を四十字以内で答えなさい。

問十一、 傍線部⑤「身体はかくも非対称である」とあるが、筆者のこの気づきをまとめた次の文の空欄【　1　】・【　2　】に入ることばを、【　1　】は五字以上十字以内で、【　2　】は十字以上十五字以内でそれぞれ文中から抜き出しなさい。

社交ダンスの相手は、その人の身体に【　1　】も含め、筆者と【　2　】ではないということ。

問十二、 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、人類学とは、普通とは何かという疑問を真正面から扱い、奇異とされるものとの違いを探求する学問である。
2、杖をついた高齢者でも、ただ身体を揺らして踊ることにより、社交ダンスの定義を覆（くつがえ）すことが可能である。
3、社交ダンスは、互いに身体を触れ合わせたり視線を重ね合わせたりすることで、意思を通わせるものである。
4、人類学の思考を用いることで、社交ダンス業界にある多様な問題を解決するヒントが得られると考えられる。
5、教室の内外でそれぞれ正しい社交ダンスが主張されていて、どれが異なるやり方にあたるかがわかりにくい。

国語

解答用紙

【一】

問一 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥

問二

問三

問四 ① ②

【二】

問一 1 2 3 4

問二 a b

問三

問四

問五

問六

問七 1 2

問八

問九

【三】

問一 1 2 3 4

問二 a b

問三 A B

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一 1 2

問十二

受験番号	

氏　名	フリガナ

得　点

HJ 2月19日